

Title	「書かれていることこそが起こることである」 (Liandikwalo Ndilo Liwalo) : 「書く」という表 現手段がもたらしたスワヒリ詩の発展
Author(s)	小野田, 風子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2017, 28, p. 41-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66374
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「書かれていることこそが起ることである」*

(Liandikwalo Ndilo Liwalo)

—「書く」という表現手段がもたらしたスワヒリ詩の発展—

小野田 風子

0. はじめに

文字を使うことに完全に慣れてしまった生活をしていると想像しにくいだが、文字社会が形成されたのは歴史上古く最近のことである。ホモサピエンスの誕生は約20万年前とされるが、最初に「書かれたもの (script)」が現れたのはたかだか約6千年前に過ぎないという(オング 1991:7)。文字を持つ言語も、世界の言語の中では非常に少数である。「言語すべてのうちで、文学を生み出すほど書くことに憂き身をやつした言語は、わずか106にすぎない」(オング 1991:24)ともいわれ、その信憑性は定かではないが、「実際に書かれることのある言語はたったの78である」(Edmonson 1971:323, 332)という推定もなされたことがある。

サハラ以南アフリカの多くの言語も独自の文字をもたなかった。その代わりアフリカでは、物語や詩の朗唱、演説、ことわざなどの口承文芸が豊かな発展を遂げてきた。そのためアフリカにおける表現を取り扱う際には、声の文化が特に注目されがちである。しかしオング(1991)によると、声の文化が中心を占める社会においては、「書かれたもの」は特別な力を持つと考えられることがある。読み書きは聖職者のような特殊な集団に制限されていることもあり、書かれたもの自体が宗教的な価値を持っていると感じられることもあるという。

スワヒリ語には、「書かれていることこそが起ることである」(Liandikwalo ndilo liwalo)ということわざがある。すべての人の一生は、全知全能の神によってすでに手帳に書き付けられているので、良かれ悪しかれ運命は避けられないという人生観を表すことわざであるが(Wamitila 2014:173)、文字通りに解釈すれば「書かれたもの」の

* 本稿は2017年1月7日に大阪大学において、日本アフリカ学会関西支部主催、基盤(S)「アフリカ潜在力」科研共催で開催された研究会「表現する主体としてのアフリカの人びとと日常生活・文学・音楽にみるアフリカの言語実践—」での発表に、加筆修正したものである。

不思議な威力を表しているようで興味深い。

本稿では、声の文化が注目されることが多いアフリカにおいて、あえて文字の文化に着目し、「書く」という表現手段がどのような威力を持っているのかという問題に取り組みたい。そのために本稿が取り上げるのは、スワヒリ語による詩の世界である。基本的には声の文化であるスワヒリ詩が、文字を受け入れ書かれるようになったことで、どのような変化や発展を遂げたのかを見ていきたい。それによって、ある言語が文字を手に入れることは、その言語表現にどのような影響を及ぼすのかというテーマについて考える。

1. スワヒリ語と筆記

まず、スワヒリ語の筆記について歴史的背景を確認する。東アフリカの海岸地方は紀元前からインドやアラビア、そして地中海諸国との交易で栄えていた。13世紀の中ごろには、イスラームを信仰しスワヒリ語を話す、いわゆる「スワヒリ人」と呼ばれる人々が形成されたといわれる(宮本 2009)。このスワヒリ人たちは商人だったので、スワヒリ語は交易用言語として徐々に海岸部だけでなく内陸部にも浸透していく。17世紀ごろには、スワヒリ人のイスラーム学者がアラビア文字によるスワヒリ語の筆記法を確立する。そして東アフリカ海岸部や内陸の交易拠点においてコーラン学校を設立し、スワヒリ語の読み書きを教え始める(Mukuthuria 2009)。この頃に多くの文書が生み出されていたと思われるが、植民地化や政変の際の焚書により、現存しているのはわずかとなっている。現存しているアラビア文字による資料の内容は、宗教的な説教詩や英雄譚、預言者の生涯や戦争などをテーマにした叙事詩が多くを占めている(Samson 2013)。

このように、スワヒリ語は早い時期から民族を超えたコミュニケーションにおいて使用されていたが、一方でその使用は貿易と布教が中心であったため、スワヒリ語による文学はスワヒリ人の特権にとどまっていた(Mazrui 2007)。

19世紀末になると、西洋による植民地統治やキリスト教宣教師らの活動によってスワヒリ語の使用範囲がさらに広がっていく。このときに宣教師たちが聖書をスワヒリ語に翻訳し、初めてローマ字によってスワヒリ語を筆記する。この頃宣教師たちは、聖書とともにチャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』やバニヤンの『天路歷程』、イソップ物語などもスワヒリ語に翻訳し現地に提供した(Mazrui 2007: 24)。

1928年にはイギリスが植民地とする東アフリカ諸国の言語的統一を図るため、ザンジバル都市部方言を標準スワヒリ語に制定し、1930年にはローマ字を用いた正書法が定められた。これにともない、植民地政府は現地人向けの学校でスワヒリ語の読み書きを教え、また英文学を大量にスワヒリ語に翻訳した。この時に翻訳された英文学の作家には、ステューブソン、スウィフト、キプリング、ルイス・キャロルなどがいるという (Mazrui 2007: 24-25)。

さて、ローマ字による筆記は、スワヒリ人以外の民族、つまり非スワヒリ人たちの間に早々と根を下ろしたといわれている。それと同時に、アラビア文字による筆記が急激に周辺化していった (Mazrui 2007: 25)。アラビア文字が使われなくなった要因には、植民地化にともなう社会システムや価値観の転換以外にも、ローマ字の簡単さやスワヒリ語との相性の良さ、宗教性の弱さなどが挙げられそうであるが、これについてはさらなる研究が必要である。

一方で、ローマ字による筆記がスワヒリ人の間にも受け入れられるきっかけとなった作家がいる。ドイツ領タンガニーカのタンガ出身のシャアバン・ロバート (Shaaban Robert) である。彼はスワヒリ人であったものの、標準スワヒリ語とローマ字を使って芸術的価値の高い詩や小説を執筆した。その作品の質の高さはスワヒリ人から認められ、またローマ字で書かれているため非スワヒリ人にも親しみやすかった。それゆえに、彼はスワヒリ人と非スワヒリ人との間の橋渡しの存在になったと考えられている (Mazrui 2007)。彼の出現によって、より多様な民族出身者がスワヒリ語をみずからの表現手段としてみなすようになったと推測できる。標準スワヒリ語とローマ字による筆記は、このようにして現地に普及し定着していったのである。

2. スワヒリ詩の発展とローマ字

2.1. 詩の規則の記述

ここからスワヒリ詩に焦点を当てていきたい。スワヒリ詩の歴史が大きく変わるきっかけとなったのが、1954年、スワヒリ詩の規則をローマ字で説明した詩論『スワヒリ詩の作詩法とアムリの詩』 (*Sheria za Kutunga Mashairi na Diwani ya Amri*) の出版である。はじめてスワヒリ詩の作詩法がローマ字で書かれ出版されたおかげで、非スワヒリ人もスワヒリ語で実際に詩作してみることができるようになったのである。これは些細なことではあるが、後々のスワヒリ詩の発展のための重要な転機となった。

詩論の著者は、イギリス領タンガニーカのウジジ出身のスワヒリ人、アムリ・アベディ (Amri Abedi) である。ここで彼が記述したスワヒリ詩の規則を簡単に紹介したい。彼によると、スワヒリ詩には必ず守られるべき4つの規則が存在する (Abedi 1954: 16-20)。①それぞれの連の行数が同じであること、②それぞれの行の音節数が同じであること、③行末と行の途中の韻がそろっていること、④それぞれの連における意味が完結していることである。これらの規則を強調することでアベディは、スワヒリ詩は厳しい規則に縛られた定型詩であるということを明確に示したのである。

以下に、アベディによる詩を挙げる。この詩は一連だけの短いものであるが、すべての行は16音節で、さらに8音節目と16音節目の韻がそろえられ、a/b, a/b, a/b, b/a という押韻パターンをみせている。スワヒリ詩の型式は複数あるが、このような音節数と押韻パターンをもつ型式は「シャイリ」(shairi) と呼ばれ、この時代の詩人たちによって最も美しい型式とみなされている。

Mtu chake apendacho, hakina ila machoni
 Huridhika kuwa nacho, japo hakina thamani
 Mapenzi hayana kicho, yaamkapo moyoni
 Mwenye mapenzi haoni, ingawa anapo macho

恋する者に 欠点見えず
 つまらぬものに 満ち足りる
 恋に不安も 消し去られ
 その目はうつろ 役立たぬ

アベディによる詩論の出版により、スワヒリ人だけではなく多様な人が詩を作ってみることができるようになった。一方で、アベディによって記述された規則にそぐわない詩は間違った詩であり、「正当なスワヒリ詩」ではないという排他的な考えが広がったとも考えられる。言い換えると、詩の規則がローマ字で書かれたことは、非スワヒリ人に対し、スワヒリ人の文化と価値観に追随させようとする強制力として働いたと想像できる。

2.2. 規則への反発

アベディがスワヒリ詩の規則をローマ字で記した約 20 年後、スワヒリ詩の歴史を変える事件が起きる。それが、スワヒリ詩界における革命とも言うべき、作詩法への反発とスワヒリ自由詩の登場である。1971 年、「スワヒリ語研究所」(Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili) の学術誌に「鼠ども」(Vipanya) という詩が発表される。これは、アベディによって記述された規則を意図的に無視した「スワヒリ自由詩」と呼べるものだった。作者は、イギリス領タンガニーカのウケレウェ出身の非スワヒリ人、ユーフレイズ・ケジラハビ (Euphrase Kezilahabi) である。彼は以下のように暗にアベディを批判している。「ある学者は作詩法という本を書いた。喜ばしいことだ。彼に感謝しよう。というのも、この本のおかげで多くの若者が詩を作ることができるようになったから。しかし詩に作り方などない！ すべての詩人は、独自の方法で詩的なアイデアを表現するものだ」(Kezilahabi 1976: 122)。

1973 年にはダルエスサラーム大学において詩の型式についてのシンポジウムが開かれた。そこでは、ケジラハビに賛同し規則からの脱却を目指す革新派 (Wanamapinduzi) と、それを認めない伝統派 (Wanamapokeo) との間で激しい議論が交わされた。伝統派を支えていたのは、スワヒリ語やスワヒリ文化の保持と伝播を目的として 1959 年に設立されたスワヒリ詩人連合「UKUTA」(Usanifu wa Kiswahili na Ushairi Tanzania) であり、さらに著名な詩人や作家たちが加わっていた (Kezilahabi 1983)。一方、革新派として彼らに対峙したのは、ダルエスサラーム大学で教師をしていたケジラハビの同僚や学生たちだった (Senkoro 1988, Ranne 2006)。この詩論争はシンポジウムの後もラジオや新聞、スワヒリ詩会を舞台に続けられ、様々な詩人がみずからの意見を表明したが、その多くは革新派に対する非難だったという (Mulokozi & Kahigi 1983)。

詩論争で争われた論点の説明に移る前に、ここで自由詩の例として、ケジラハビの詩集の中から筆者の好きな詩を紹介したい。以下は彼の二作目の詩集『ようこそ中へ』(Karibu Ndani, 1988) に収められている詩、「夕暮れの紅茶」(Chai ya Jioni, p. 3) である。

Wakati tunywapo chai hapa upenuni

Na kuwatazama watoto wetu

Wakicheza bembea kwa furaha

Tujue kamba ya bembea yetu
Imeshalika na imeanza kuoza
Na bado kidogo tutaporomoka.

Kulikuwa na wakati ulinisukuma juu
Nikaenda zaidi ya nusu duara;
Kulikuwa na wakati nilikudaka
Ulipokaribia kuanguka,
Na kulikuwa na wakati tulibebana kwa zamu
Mmoja wima akisukuma mwingine amekaa.
Wakati huo, japo tulipaa mbele na nyuma
Tulicheka kwa matumaini yaliyotiwa chumvi
Na kisha tukaongozana jikoni kupika chajio;
Ilikuwa adhuhuri yetu.

Sasa tukisubiri ndoto tusizoweza kutekeleza tena
Tumalizie machicha ya chai yetu ya jioni
Bila kutematema na kwa tabasamu.
Baada ya hapo tujilambelambe utamuutamu
Uliobakia kwenye midomo yetu,
Tukikumbuka siku ilee ya kwanza
Tulipokutana jioni chini ya mwembe
Tukitafuta tawi zuri gumu
La kufunga bembea yetu
Naye mbwa Simba akikusubiri.

Lakini kabla hatujaondoka kimyakimya
Kukamilika nusu duara iliyobakia.
Tuhakikishe vikombe vyetu ni safi

この軒下で紅茶を飲み
子どもたちが楽しそうにブランコで
遊んでいるのを見ているとき
わかっているだろう、私たちのブランコの縄は
すり切れて腐り始め
私たちはもうすぐ落ちるだろうことを

あなたに押されて
半円よりも高く上がったこともあった
落ちそうになったあなたを
私が受け止めたこともあった
一人は立ち、もう一人は座って
抱き合いながら交代で漕いだこともあった。
そのとき、私たちは前へ後ろへと浮き上がっていたのに
誇張された希望にあふれて笑っていた
それから夕食を作り台所へと連れ立って行った
それが私たちの午後だったのだ。

今、私たちは二度と実現できない夢を待ちながら
夕暮れの紅茶の搾りかすを飲み干そう
吐き出すことなく ほほえみを浮かべて。
それから口の周りに残った
かすかな甘みをなめながら
夕暮れ時にマンゴーの木の下で
はじめて出会ったあの日を思いだそう
私たちはブランコの縄を結ぶのに
ちょうどよい丈夫な枝を探していた
そしてシンバという名の犬はあなたを待っていた。

しかし円の残りの半分を完成させるために

忍び足で立ち去る前に

私たちのカップがきれいなことを確かめよう。

原文を見ると、一連の行数や一行の音節数の一致、押韻などの、アベディによって記述された規則がまったく守られていないことがわかる。また、その内容に目を向けると、詩人の個人的な心の中の情景を描いたものとなっており、最初に紹介したアベディの詩の、「愛とはこういうものである」といった一般常識をことわざ風に並べたものとは大きく異なっている。このように、自由詩の新しさは詩の型式だけではなく語られる内容にも見出せると思われ、さらなる研究が必要である。

2.3. 詩論争とその成果

さて、ケジラハビによる自由詩の発表後、詩の規則を重視する伝統派とそれに反発する革新派の間で、約 10 年間に及ぶ激しい論争が巻き起こった。ここで、論争の要点を簡単に紹介したい。まず、伝統派の自由詩への批判としては、自由詩という詩の分野そのものの否定がある。自由詩と呼ばれているのは規則に従えない詩人が書いた欠陥のある詩にすぎないというのである。また、韻律と音節数の一致が詩の定義でないならば、詩とそれ以外のテキストとの違いがなくなるという指摘や、自由詩とは西洋かぶれの文化であり、アフリカ起源の定型詩を重んじるべきという主張もあった。

一方、革新派は以上の論点に対し、最初から定型詩を書こうとしていないため、自由詩は欠陥のある詩ではないと反論する。また、規則は詩を縛り、詩人は内容を重視せず規則の奴隷となることで、芸術は腐敗してしまうと論じた。さらに、自由詩が西洋かぶれの文化であるという指摘に対しては、定型詩こそがアラビア詩に端を発しており、伝統派はアラブの文化的植民地主義に囚われていると応酬した。また、スワヒリ語は今やスワヒリ人だけのものではなく、東アフリカ全土の共通語となったのであり、規則は複雑化する多様な現代社会を表現する際にそぐわないと主張した (Topan 1974, Kezilahabi 1983, Mulokozi & Kahigi 1983)。この詩論争は、その後約 10 年間スワヒリ文学の論壇をにぎわせ、この問題を扱った多くの書籍が出版された。

1980 年代に入ると、論争の勢いは下火になっていった。詩論争の後も定型詩の主流は変わらなかったようである。例えばケジラハビは 1983 年に出された評論において、現在 (1983 年) でも出版物や新聞においては「伝統派」が主流であることを認め、詩

の論争は過去のものとなっていることを嘆いている。また、筆者が2016年9月にタンザニアのダルエスサラームとザンジバルにおいて、一般市民に対し行ったインタビューでも、スワヒリ自由詩の存在を知っている人は22人中4人、好きな詩人として自由詩の詩人を挙げた人は一人だけであった。定型詩の人气が根強い背景には、書かれた文学という文化が人々の間に十分に浸透していない現状があると思われる。詩は、詩集の黙読というよりは、音楽の歌詞や朗唱など口頭で楽しまれることが多いため、韻や音節数の一致が重要になってくるのは仕方がないことだろう。

では、現在も定型詩の主流は変わらないならば、詩論争の成果や意義は何だったのだろうか。2016年9月、論争の中心人物の一人であった自由詩人で、現在はダルエスサラーム大学で教鞭を執るムギャブソ・ムロコジ氏 (Mugyabuso Mulokozi) にインタビューする機会を得た際、筆者はこの問いを投げかけた。彼は以下のように語った。「論争の重要性とは、詩人たち、特に伝統的な詩を書く詩人たちに、みずからの詩について再考することを強いたことと考えている。かつて彼らは形式に従い他の人の詩を模倣するだけで、詩について深く考えることはなかった。現在、人々は詩の在り方に意識的になり、自分はどのように詩を書きたいのか考えるようになった」。すなわち詩論争の成果とは、それまで自明と考えられてきた価値を相対化し、「詩とは何か」という問題について考えるきっかけを与えたことと言えるだろう。

実際に、論争後のスワヒリ詩界は、論争前とは完全に様相を変えている。特に論争以降に詩を書き始めた世代は、定型詩と自由詩の区別にそれほど囚われていないように見える。彼らの詩集には定型詩と自由詩が隣り合って収められていたり、その中間の形の詩もあつたりと、より自由に詩作を愉しんでいる印象を受ける。また、筆者は2016年9月にダルエスサラーム大学で開催された「スワヒリ語・東アフリカ国際学会」(Kongamano la Kimataifa la CHAKAMA) に参加する機会を得たが、そこでは著名な定型詩人と自由詩人が一堂に会していた。さらに、壇上で定型詩が朗唱された後に、新しく出版された自由詩の詩集が紹介されるという光景も見られた。以上のことから、定型詩、自由詩の双方がスワヒリ詩として認められ、スワヒリ詩の表現の可能性が広がったと言えるだろう。

ここで、詩論争以降の世代の中で特に有名な詩人である、ムハンメド・セイフ・ハティブ (Muhammed Seif Khatib) による詩を紹介したい。彼は1951年にザンジバルで生まれ、詩人であるとともに、与党 CCM の議員としても活躍する人物である。彼の

詩集『底辺の人々』(Wasakatonge, 2003) は中学校の教科書に採用されており、収められている詩は社会的弱者に光を当て、腐敗や格差を告発するものが多い (Mhilu 2008)。またそれらの詩の型式をみると、約 8 割は音節数や押韻によって何らかのリズムをもたせた中間的な型式を取り、残りは完全な定型詩と自由詩が半分ずつを占めている。今回紹介するのは、この詩集の大部分を占める中間的な詩の一つであり、詩集の表題作でもある「底辺の人々」(Wasakatonge, p. 5) である。

1. Wasakatonge na juakali

Wabeba zege ya maroshani,
Ni msukuma mikokoteni,
Pia makuli bandarini,
Ni wachimbaji wa migodini,
Lakini maisha yao chini.

2. Juakali na wasakatonge

Wao ni manamba mashambani,
Ni wachapa kazi viwandani,
Mayaya na madobi wa nyumbani,
Ni matopasi wa majaani,
Lakini bado ni maskini.

3. Wasakatonge na juakali

Wao huweka serikalini,
Wanasiasa madarakani,
Dola ikawa mikononi,
Wachaguliwa wa ikuluni,
Lakini wachaguaji guni.

4. Juakali na wasakatonge

Wao ni wengi ulimwenguni,

Tabaka lisilo ahueni,
Siku zote wako matesoni,
Ziada ya pato hawaoni,
Lakini watakomboka lini?

1. 貧しさゆえに身を削り働く人々
それは建築用セメントを担ぐ者たち
手押し車を押す者たち
また、港湾労働者たち
それは鉱山の鉱員たち
しかしその生活は底辺だ
2. 身を削って働けども貧しい人々
それは農場の小作人たち
屋台の必死の売り子たち
家庭の乳母や洗濯人たち
ゴミ捨て場の汲み取り人たち
しかしいつまでたっても貧乏だ
3. 貧しさゆえに身を削り働く人々
彼らは政府を設ける
特権を与えられた政治家たちを
権力を思うままにし
大統領官邸に居座る選ばれし者たちを
しかし選ぶ者たちが低級だ
4. 身を削って働けども貧しい人々
彼らは世界の多数派だ
容赦のない階級社会の中で
常に苦しむ側にいる

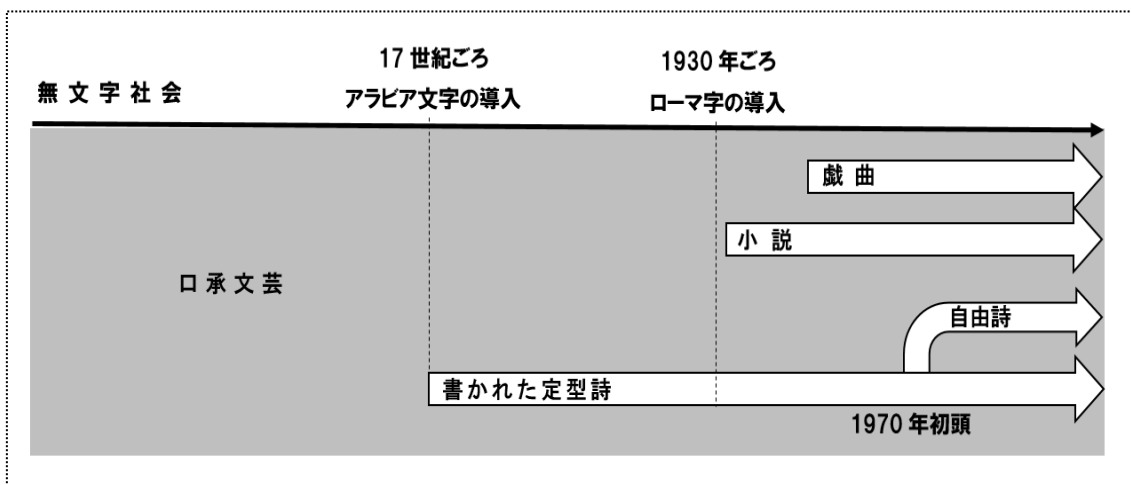
収入は決して余らない
いつ彼らは救われるのか？

原文を見ると、特定の定型詩の型には当てはまらないものの、音節数と韻がある程度そろい、詩に一定のリズムを作り出していることがわかる。また、連の一行目だけを追っていくと、“wasakatonge”と“juakali”という単語が交互に置かれていることに気づく。“wasakatonge”とは食うや食わずの者を意味し、“juakali”とは照りつける太陽のもと働く者を指す。これらの単語を連ごとに交代させ、繰り返し提示することで、和訳で意識したように、どれほど苦勞して働いても貧しさから抜け出せないという焦燥感や絶望感を表現しようとしているのだろうか。たたみかけるような調子が印象的な詩である。

3. 「書かれたこと」がもたらした詩の発展

ここまで、スワヒリ詩の規則の記述と自由詩の誕生、そして詩の論争の勃発という流れを、それぞれ詩を例示しつつ追ってきた。さて、スワヒリ自由詩がもたらした詩論争の激しさは、ある疑問を呼び起こす。それは、スワヒリ語による小説や戯曲も西洋によってもたらされた新しい形式だったにも関わらず、なぜ自由詩だけが西洋かぶれの文化と激しく批判されたのか、という疑問である。

この疑問にもやはり「書かれたもの」の威力が大きく関わってくるように思われる。以下にスワヒリ文学の流れを模式図で表した。この図から明らかなように、小説や戯曲とは異なり、スワヒリ詩は書かれた文学としての長い歴史があった。小説や戯曲は



口承文芸の中から忽然と現れた文化だったが、詩はそれ以前にアラビア文字で書かれた遥かに長い文化があったのである。自由詩は完全に新しい文化としてではなく、すでに確立された文化の変形として、それを脅かす存在としてスワヒリ文学界に加わったのである。小説や戯曲と自由詩のこのような認識の違いは、一度文字に書かれてしまうと、それは「正しいもの」として権威化され、柔軟性がなくなってしまうということを示している。

では、スワヒリ詩の発展をまとめる。スワヒリ詩は早くからアラビア文字によって書かれることで、スワヒリ人の文化圏の中で権威化され伝統として形成されてきた。その後、アラビア文字という筆記法を奪われても、ローマ字筆記と出版という手段を新たに導入することによってその伝統を保持し、さらに非スワヒリ人の間にも普及させようとしてきた。しかし、アラビア文字で形成されてきた伝統を理解しない非スワヒリ人たちは、それぞれ独自のインスピレーションに従って詩を書こうとした。そのことが、スワヒリ人の激しい反発と多様な人を巻き込んだ論争を引き起こしたが、この論争は結果的にスワヒリ詩に深化と成熟をもたらすことになった。よって、現段階での結論として、「書かれること」によってある文化は権威化され、柔軟性が失われるが、同時に権威に挑戦し乗り越えようとする原動力も生み、芸術を活性化するということが言えるだろう。

4. おわりに

本稿ではスワヒリ詩の世界を取り上げ、文字に書かれることがある文化に及ぼす影響を考えてきた。スワヒリ詩は、その歴史においてアラビア文字とローマ字という二つの文字によって書かれてきた。書かれることによって権威が生まれるという意味では二つの文字に違いはないが、その権威の範囲は決して同じではない。アラビア文字による筆記については、とても本稿で扱えるテーマではないが、おそらくスワヒリ詩の様々な体系を形成、強化し、保存する働きはもっていたと思われる。しかし文字はまだ手で筆記されていたために、その文化の範囲はある特定のコミュニティにとどまり、万人に受け入れられることを目指すような性質のものではなかったと考えられる。一方、ローマ字による筆記は、印刷・出版という新しい制度によって、それまでの受け手を遥かに越える不特定多数にその文化をとどけることを可能にした。ローマ字による詩の規則の記述と出版が強い反発と議論を生んだ背景としては、印刷技術の導入

によって「書かれたもの」の権威がより広範囲に及んだことも挙げられるだろう。

印刷技術がスワヒリ詩、あるいはスワヒリ文学に及ぼした影響については、とても本稿で扱えるテーマではないため、今後の研究の課題とする。本稿では、文字という表現手段は、権威を生み出すからこそ反発と議論を招き、文化を活性化させる力をもつということを述べるにとどめたい。

参考文献

- オング, ウォルター・J. 1991. 『声の文化と文字の文化』 桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介 訳, 藤原書店.
- 宮本正興. 2009. 『スワヒリ文学の風土—東アフリカ海岸地方の言語文化誌—』 第三書館.
- Abdulaziz, Mohamed H. 1979. *Muyaka: 19th Century Swahili Popular Poetry*. Kenya Literature Bureau.
- Abedi, K. Amri. 1954. *Sheria za Kutunga Mashairi na Diwani ya Amri*. Kenya Literature Bureau.
- Edmonson, Munro E. 1971. *Lore: An Introduction to the Science of Folklore and Literature*. Holt, Rinehart & Winston.
- Kezilahabi, Euphrase. 1976. “Ushairi na Mapokeo na Wakati Ujao” J. P. Mbonde. *Uandishi wa Tanzania: Kitabu cha Kwanza - Insha*. pp. 121-137. East African Literature Bureau.
- . 1983. “Uchunguzi katika Ushairi wa Kiswahili.” pp.144-163. C. W. Temu. *Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili III, Fasihi*. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili.
- . 1988. *Karibu Ndani*. Dar es Salaam University Press.
- Khatib, Muhammed Seif. 2003. *Wasakatonge*. Oxford University Press.
- Mhilu, Greyson & Nyambari Nyangwine & Yesse Kanyuma. 2008. *Tahakiki: Vitabu Teule vya Fasihi, Kidato cha 3 na 4, Nadharia, Uhakiki na Maswali*. Nyambari Nyangwine Publishers.
- Mazrui, Alamin. 2007. *Swahili Beyond the Boundaries: Literature, Language, and Identity*. Ohio University Press.
- Mukuthuria, Mwenda. 2009. “Islam and the Development of Kiswahili” *The Journal of Pan*

African Studies, Vol. 2, No. 8.

- Mulokozi, M. M. & K. K. Kahigi. 1983. *Kunga za Ushairi na Diwani Yetu*. Tanzania Publishing House.
- Ranne, Katriina. 2006. "Drops That Open Worlds – Image of Water in the Poetry of Euphrase Kezilahabi." Master's Thesis, University of Helsinki, Faculty of Arts, Institute for Asian and African Studies, African Studies.
- Rollins, Jack D. 1983. *A History of Swahili Prose*. E. J. Brill.
- Samson, Ridder H. 2013. "Swahili Manuscripts: Looking in East African Collections for Swahili Manuscripts in Arabic Script" Center for the Study of Manuscript Cultures, University of Hamburg.
- Senkoro, F. E. M. K. 1988. *Ushairi: Nadharia na Tahakiki*. Dar es Salaam University Press.
- Topan, Farouk M. 1974. "Dibaji" *Kichomi*. pp. vii-xii. Heinemann Educational Books.
- Wamitila, K. W. 2014. *Kamusi ya Methali*. Longhorn Publishers.